

序	視線の先には	006
第一話	三人のセンチ	012
第二話	本日の個人授業♥	042
第三話	ヒミツの準備室とヒミツの体育倉庫	075
第四話	ドキドキの校舎裏	117
第五話	先生の秘密	155
第六話	めざせ百点っ！	202
最終話	終わりは始まり	250

登場人物紹介

Characters



くしまきや
久島沙耶

弘樹のクラスの副担任の先生。
受け持ちは生物。



いざわみどり
井沢翠

弘樹の家庭教師。弘樹には、国語・数学・英語の主要三科目を教えている。



たきいゆかり
滝井由香里

弘樹の同級生。昼休みの図書室で弘樹の勉強を見てあげている。

かきたひろき
柿谷弘樹

成績が悪い男子生徒。沙耶に憧れている。

ありえなかつた。呆然としていた。言葉が出てこない。そんな状態の少年の前で、女教師の顔が悲しげに歪む。じつと弘樹を見つめながら一語一語しつかりと口にのせる。

「それとも……私なんかのご褒美じゃ、だめ？ 柿谷君——」

そんなことはないと言いたいの、唇が開かない。硬直している少年の前で久島教師はがっくりと肩を落とした。なんだか急に小さくなってしまったような、そんな感じがするほどの落ち込みぶりだった。

「そうよね……翠と違って、私、カタイばかりで魅力ないものね——ごめんなさい」
胸が痛くなつた。彼女を傷つけるつもりなんてまったくくないのに。

「そんなこと、ないです。久島先生は魅力的です。先生のご褒美なら……その……」
「本当？ 私でも柿谷君にご褒美をあげることができる？」

それは当たり前のこと。彼女以上に少年にやる気を出させることのできる人などいない。弘樹が力をこめて頷くと、ぱつと光がさしたように沙耶の表情が変わる。たった今までの落ち込みぶりが嘘のようだった。

「ありがとう、柿谷君。私もがんばるわっ。一生懸命勉強しましょうっ」
「はっ、はい」

気丈な沙耶は立ち直りも早かつたが、その変貌ぶりも激しかった。なんと、彼女は翠のエッチなご褒美の内容を少年に聞き取り始めたのだ。それも、直接自分の身体を使いながら。熱心で有能な女教師の面目躍如だった。

「ふむふむ。そんなこともするのね。……こんな感じ？ それとも、こう」

「え、えーと……もっと優しく、そっと包むように……」

手コキ。フェラチオ。そしてセックスまではしないと断言したけれど、時には少年の身体に触れ、自分の身体に触れさせながら。柔らかく、それでいてしなやかな沙耶の身体に少年はすっかりガチガチになってしまった。

気づくと少年のズボンの前は開かれ、恐る恐る沙耶がそれに手を触れている始末。憧れの女教師の手のすべやかな感触だけで発射してしまいそうだ。

「うっ、うう……。あ、あの……先生？ そこまでしなくても……」

「何を言ってるの。柿谷君のやる気を出させるためでしょう。ガッチリやるわよっ」

少年の興奮には気がつかず、久島沙耶教師はやる気満々。一方の手で弘樹の下半身に触れながら片手でノートに書き込みを続け、詳細にエッチなご褒美のレポートをまとめていく。少年はあまりにあけすけな質問と沙耶の気迫に圧倒されていた。

（どうしよう……こんなに触られちゃ、我慢できなくなっちゃうよ。しかも——）

どんな風に翠がしたのかも実際に確かめようとして、少年の性器を撫で回しながらご褒美の時の状況を再現しようとする。あまりに完璧主義なため少年がご褒美の時そのままに興奮してしまっていることにも気づいていない。

「それで、こんな感じで……手で包んで……きゃあっ」

ほっそりとした指の間でペニスがビクンと大きく痙攣し、先走りの粘液がトロトロと鈴

口からこぼれ落ちた。反射的に手を引つ込めてしまった沙耶がバツが悪そうに少年の様子をうかがった。

「あつ、あははつ……あの……これって、その……柿谷君が……」

「はい、我慢……できなくなっちゃいました。すいません……感じちゃってます」

それだけ言うのが精一杯だった。沙耶は生徒のために頑張ってくれているだけなのに、弘樹は股間を大きくしてしまっている。自分が情けないと思った。

「嬉しいわ。柿谷君が私のご褒美でも喜んでくれるんだもの」

「え、先生……それって……」

戸惑う少年の唇に指をあてがい、それ以上の発言を封じる。

「柿谷君に、最初のご褒美をあげる。ただし、誰にも内緒でね」

それは教師としての使命感なのか、生徒にやる気を出させることができるという喜びなのか。先程までの落ち込みぶりとはまるで違う顔つきだ。いつもの、しっかりとした表情が戻ってきていた。——ちよつと方向が違っているようではあったが。

「それで……このコチンコチンのを、発射させてあげられればいいのよね」

くそ真面目な顔つきでペニスに触れている女教師。もう片方の手はノートを開いている。まるで実験動物になった気分だが、快感は本物だった。沙耶は彼女なりに本気で彼を射精に導こうとしている。少年に教えられたことを反芻しながら、さわさわとペニスを弄びながら、かすかな笑みが美貌に浮かんでいた。

「私にぜひひして欲しいことって、ある？」

ピクンッ！ そう訊ねられた瞬間、ペニスが跳ね上がるように反りかえった。

「ふふっ。あるんだ……いいわよ。言ってみて。できることなら挑戦してみるわ」

少年は否定したかったが、男性器をしっかりと握り締められてしまっていては逃げようもない。彼の反応は筒抜けだ。

「あ、あの……」

「いいのよ。言ってごらんさい」

口調もいつもの沙耶に戻っていた。優しいながらも一本すじの通った、きりつとしたものの言いだ。少年はおおずと答える。小さな声で、今まで隠してきた欲望を。彼女に嫌われてしまうかもしれないと思ったけれど、もうあとには退けない。

「先生のおっぱいで……して欲しいです」

その言葉は、すぐには通じなかった。

「おっぱいって……私の胸で？ それって……どうするの？」

真面目な沙耶にとっては知識の外であるらしい。困った少年は、どもりながら説明する。ブラジャーをとって、先生の大きな胸でペニスを挟んで愛撫して欲しい、と。いわゆるパイズリだけれど、説明するのはかなり恥ずかしい。

「そんなこと、できるんだ……。翠はしてくれないの？」

「あの、よほど胸が大きい女の人でないと……無理じゃないかと思えます」

そう言われた沙耶は自分の胸の膨らみを見下ろして苦笑する。

「うーん。男の人にとって、そんなにいいものなのかしら。私は大変なだけなんだけど」

「そんなことないです。素敵だと思えます。すぐく女性らしくて、綺麗で——っ」

必死な言葉に女教師が微笑んだ。少年の手を自分の胸に導くと、その指でスーツのボタンを外させていく。ただ嬉しい指遣いだったが、沙耶はじっと待っていた。

「やってみるわね。柿谷君の好きなおっぱいで……」

ブラウスをはだけてブラジャーを外すと上半身裸だ。ブラジャーを外した瞬間プルン、と大きく揺れる乳房は、キツイ拘束から解放されたかのようなだった。ブラウスの上からは信じられないほどに大きな乳房が、重々しく揺れている。

（す、すぐく……大きい……っ。ブラジャーで抑えていたんだ……）

この生物準備室に朝から来るのは沙耶くらいのもものだけけど、念のために扉に鍵がかかっていることを確認した教師が生徒に向き直る。用意のよい女教師はボックスのティッシュペーパーまで用意していて、その本気度が伝わってくる。

何もしなくても深い谷間が刻まれている胸。両側それぞれの胸がポリウムたつぷりにもかわらず垂れずに立ち上がっているせいだ。世間的には巨乳というよりも爆乳と呼ぶにふさわしい量感たつぷりのおっぱいだ。

「こんな感じかしら。私はよくわからないから、柿谷君が教えてね」

そう言いながら、立ったままの少年の前にひざまずくようにして、突き出されたペニス

に胸を近づけていく。見下ろす形になった少年からは胸の谷間が強調されて鼻血ものの光景だった。思わず息を吞んでしまう。

ふつくらとしたまろやかな乳房の曲面が歪み、二つの乳房の間に熱い男の欲望を飲み込んでいく。キメの細かい肌が亀頭とこすれあい、そのすべやかな感触が男の官能を直撃する。ピクピクとペニスが震え、若者の腰がガクガクと動いた。

「う……ううっ——っ。すごいつ。すごいです、久島先生——！」

「そ、そんなに気持ちいいの？ 私のほうは……なんだか変な感じ……」

さすがに恥ずかしいのか、頬が赤く染まっている。目尻のあたりまで赤くなっているところが色っぽい。そんな女教師の反応が新鮮でさらに興奮してしまった。

「すごく気持ちいいですっ。さ、最高ですっ」

大げさな台詞だったが、弘樹にとってはまさに最高だった。憧れの女教師、いつも厳しくて怒られてばかりの久島先生が奉仕してくれている。それも、あの大きな胸でしてくれている。それだけでイッてしまいそうなほどに気持ちいい。

「そ、それで……両方の手で胸をよせて、押さえつけるように……」

「こ、こう？ こうなのね。柿谷君、気持ちいい？」

両方の乳房に手を添えると、ペニスに押し退けられていた肉が戻ろうとしてぐっつと圧力を増してくる。むっちりとした感触が翠の膣内とはまったく違った感触で亀頭を圧迫してくる。それは口の中とも違う独特の圧迫感だ。膣や口の中に比べると均質な締めつけと言

えるだろうか。

「すごく……気持ちいいです。それで、上下に動いてもらって……いいですか？」

「も、もちろん、いいわ。これで……その、動けばいいのね」

彼女が腰から動いてくると、胸の谷間がニユルニユルと肉槍をすりたててくる。上下の動きに乳房が揺れるのがさらなる刺激を呼んで男根を攻め立てる。

沙耶も段々飲み込めてきたようで恥ずかしい要求にも応じてくれる。要はペニスに刺激を与えてやればいい。いつの間にか亀頭の先端から滲んできた粘液を嫌がることもなく、白く輝く乳房に塗りたくる形になるのをそのままにしていた。

「うっ、ううっ。そうですっ。すごく……気持ちいいですっ」

その言葉に嘘はない。実際にこれほど気持ちいいとは思わなかった。アダルトビデオなどで言うほど気持ちいいのかという疑問があつて、大きなおっぱいで挟まれたという憧れだけではないかと思つていたので。

だが、それは杞憂だった。すべすべして柔らかい膨らみに挟まれているだけでも敏感な亀頭部が圧迫されて心地よいだけでなく、手で乳房を押さえ動かすことによつて快感を増幅される。それに上下の動きも加わるのだから、女性器とはまったく違う、ダイナミックな動きのある気持ちよさだ。病みつきになつてしまふそうだ。

「んん……感じてくれているのね。嬉しいわ。私も……ちよつとヘンな感じなの」

いつの間にか、乳房がピンク色に染まっていた。目元まで染まつて色っぽかった顔も、

気づけば耳まで真っ赤になっている。知的なメガネの奥の目もかすかに潤んでいる。実に官能的な眺めだった。

（先生も興奮しているのかな——なんだかすぐくエッチな感じだ——つ）

ブラウスもはだけて柔肌を露わにしていながらのタイトスカートは逆に卑猥な感じがした。ましてやここは学校の生物準備室。生徒と教師。背徳の快感を感じていた。

「んっ——。んんっ。どうかしら。気持ち……いい？ どんどん教えてね」

教えてと言われても、少年とて初めての経験だ。その間にも快感は高まり、いつしか乳房はカウパー氏腺液にまみれてヌラヌラと光る。男性器はひっきりなしに震えながら龟头部を収縮させて、もう先走りの液を滲ませて射精寸前の状態だった。

ニユルニユル——ッ。

ビクン、ビクンと震えるペニス快感の波を発しており、痺れるような官能のうねりは腰の中心から全身に広がっていく。

「先生っ、僕……僕はもう……イキそうなんですっ。うっ、ううっ——」

「はっ、はいっ。大丈夫、柿谷君。苦しくない？ ああっ、ヒクヒクしてっ——」

少年のせつなげな声に驚いた女教師は、それでもやはり興奮しているようだ。無意識のうちにもその手の動きは激しくなり、若い男性器を快楽の頂点に向かって追い立てていく。

ジュプッ。ムニユウッ——ッ。ニユルリッ——！

「せっ、先生。先生も——気持ちいいですか？ 僕だけじゃっ……」

それは少年の本心だ。自分が気持ちよくなりたいたいののはもちろんだが、自分だけでは嫌だった。いつも憧れていた久島先生にも気持ちよくなって欲しい。

「ああ……私もなんだか……痺れるような感じで……ヘンなの……っ」

弾力たっぷりの柔らかな膨らみの間でペニスがかねまわされ、しごかれ、すりたてられる。その動作の一つごとに快感の粒子が亀頭粘膜にしみこみ、熱い血流に乗って全身に行き渡る。

「すごい……柿谷君のが、ビクビクいって……苦しそう——っ」

「ああっ、先生っ、僕——もう、もう我慢できないっ——！」

女教師が用意していたティッシュペーパーを男根にあてがうのと、少年の快感が抑制を突破するのはほとんど同時だった。下半身の中心からドロドロと渦巻く欲望の液体が奔流となつて迸る。

「うっ、うわっ……で、出るっ！、出ます、先生っ、先生——っ！」

ビクンッ！ ビク、ビクッ！ ドピュドピュドピュ——ッ！

驚いた女教師の胸がペニスから離れてしまったが、その代わりに優しい手が男性器を包んでいた。柔らかく、それでいてしなやかな指が肉竿にからまり、これはまた別の快感を生む。射精の瞬間の激しい肉悦の沸騰をさらにおおる淫らな手だった。

「そ、そのまましごいて——。全部、絞り出してくださいっ——」

「うん……こう？ これでいいのね。ああっ……すごく……熱いのね……」



でも、今は先生を感じさせたい。ジンジンとペニスと下半身から広がってくる快感をこらえながらも少年の口は美教師の急所をとらえていた。

一本すじの割れ目と化している秘裂の中に隠れている花弁を舌尖でほじりだし、唇と舌とで挟み、こじあげ、しゃぶりまわす。柔らかくて温かい女性器はすでに潤っていて、舌を差し込むと奥からジュワリと滲んでくるほどだ。

「くふっ……あっああっ……そんなところを広げちゃだめっ」

だめと言われても止まるわけがない。さぐればさぐるほどに深く、しゃぶればしゃぶるほどに濡れて甘みな蜜をしたたらせる女性器に執着していた。

両手で憧れの先生の下半身を抱え込み、顔を股間に押しつけながら憧れの女性のしたたらせる甘露を舐め取り、飲み下すのは無上の快楽だった。

「うわー、ヒロ君、もう夢中じゃない。よほどお姉ちゃんのが美味しいのね」

「そっ、そんなこと……そんなことないからっ……あふうっ……柿谷君……っ！」

激しい快感に身もだえする女教師は両手で少年の顔を引き離そうとするが、実はすでに力など入っていない。むしろ股間に教え子の顔を押しつけようとしているかのようだ。ピクン、ピクンと身体を反りかえさせるたびに大きな乳房がユサユサと揺れ、すでに勃起している乳首が優美な弧を描いていた。

「ああふっ……あ、あそこを、そんなにしないで……ひゃあっ」

すっかりトゲのとれた美貌。メガネの下の瞳はすっかり潤み、長い睫毛にはかすかに涙

すらすらとまっている。両手で少年の頭を押さえようとするその間で、大きな乳房が腕に挟まれるようにして胸の谷間を強調されていた。

ピチャッ、クチュッククチュッ、チュルチュルッ——！

少年の舌の動きとともに恥ずかしい音が股間から漏れるのも厳格な女教師の廉恥心に大きく傷をつけたようだ。見た目よりもはるかに弱い卵のむき身のような、汚れない真っ白な処女の心と肉体をキャンバスに、少年は自分自身の手指や唇、舌を筆に快楽という名の絵画を描く。

「はああんっ——っ。は、恥ずかしいのにつ……へんなのっ……ひんっ?!」

いつの間にか力が抜け、少年の頭に手を置くことによって辛うじて上体を支える沙耶のうなじがそろりと撫で上げられた。翠の手だった。そのまま背中から姉の身体を支えるようにしながら、その大きな胸に手を回していく。

「あたしもお手伝いしてあげる。思い切り気持ちよくなってね、お姉ちゃん」

「そっ……そんな……っ、いらないっ、いらないからあ……もう、もう……ああああっ」

学校中の羨望と欲望の視線が注がれる大きな乳房に肉親の指がくいこみ、タブタブと下から持ち上げるようにして揉み上げる。すでに快楽に身を焼かれていた女教師は愉悅を声にして吐き出すことしかできないようだった。

「くう……っ、由香里、そんなにしたら、僕が……イッチャうよっ……っ!」

沙耶を下から攻めているはずの少年の口から悲鳴にも似た呻きが漏れる。憧れの女性の

花芯を口でとらえ、思うさま味わっているだけでも激しく興奮しているというのに、下半身からみつく幼なじみが若いペニスを弄んでいる。

「イッひやつれいいろよ。んぐっ……弘樹君の精液、私に飲ませて欲しいの」

すねている。少年に奉仕しながらも優等生は少年に愛撫される美教師に羨望を隠せず、快楽を自分に与えてくれない恋人に対して意地悪をしたくなっているらしい。

チュパッ。チュクチュクッ、シユルシユル——！

この数カ月のうちに覚えたテクニクを駆使して弘樹を肉悦のカーブの頂点に導こうとする由香里。その可憐な唇が若者の固く熱い肉茎を奥までくわえこみ、両手の指で竿を激しくしごく。ほっそりとした指の中でペニスがビクビクと痙攣していた。

「あらあらだめよ、由香里ちゃん。今回のオチンチンはお姉ちゃんのものなんだから」
「やっぱり目の前にしていると欲しくなっちゃうけど……わかりました」

心底残念そうに少女が呟き、澁々と男根を解放する。すでに腰の奥底から湧き上がるような圧倒的な快感が肉茎に充満し、破裂してしまいうだ。射精寸前のところで快楽を中断された少年の中でもどかしくも苦しい衝動が腰を震えさせる。

「あー、確かにヒロ君、我慢できないみたいね。それじゃあ、お姉ちゃん……」
「な、何っ……ひいっ……みどりっ……そこ、そこ違うっ」

女教師の悲鳴があがった。たつぷりとローションを塗り込めていたしなやかな中指が沙耶のお尻のすばまりを狙っているらしい。お尻の割れ目の間の、小さくもしなやかで、時

には広がる排泄器官。少年に下半身を抱き留められて身動きできない女教師には逃げることも身を守ることもできない。

「うふふつ。お姉ちゃん、ここも処女だけど……ここならヒロ君にあげられるよね」
くにゅつ。くにゅつ——ちゅぶりつ——。

「きやううつ……そ、そんなあつ……あつあつくうううつ」

ついに内部に進入した指がクイクイと折り曲げられ、内側からアヌスを刺激する。身体の内側をかきまわされる異様な感覚に呻く沙耶だったが、翠の巧みな手つきは少しずつ姉の肛門に快感を縫いつけていた。ちくり、ちくりと針と糸で縫いつけるように、厳格で強気な姉教師の菊座に肉悦を植え込んでいくのだった。

「くすくすつ。お姉ちゃんつてすごく敏感だから、もう気持ちいいのよね。どう？」

「きつ、聞かないで……ああつ、恥ずかしいのつ、恥ずかしいの……ひいっ」

半ば悲鳴のような嬌声。ビクビクと太腿の筋肉が痙攣する。少年が抱え込んでしゃぶり尽くそうとしている秘裂は汲めども尽きぬ泉となり蜜をトロトロとしたらせている。敬愛し、憧れ、恋慕してきた女教師の嬌態は大きな驚きだった。

（すつ、すごい……これつて……僕にお尻でしろつて……いうことなのかな……）

熱く固いペニスがグンと角度を増し、先端から欲望の粘液が糸を引いて光る。お尻の穴を妹の指で貫かれている女教師の官能の悶えはますます激しくなっていく。タップと揺れる乳房はいつの間にか汗でぬめるように光り、淫らさを増していた。

「さあ、お姉ちゃん。こっちよ。ヒロ君、ちよつとだけごめんさいね」

「ひいっ……翠、助けてっ……そこっ、そこはさすがのおっ——」
くいつ。

美貌の家庭教師のわずかな動きで姉教師の上半体は直立した。アヌスを貫くたった一本の指に逆らえないまま、沙耶はクルリと後ろを向き、妹の指に貫かれたままの排泄器官をさらしてしまふ。

「柿谷君……、みつ、見ちゃだめっ。先生のこんな姿、見ちゃだめえっ」

「だめよ。お姉ちゃんの可愛いところ、ヒロ君に全部見てもらわないとね」

片手で沙耶の腕をとって手をつかせると、憧れの女性はいいに四つん這いになってしまった。少年の目の前に、年上の女性の成熟してふっくらとしたお尻とヌプヌプと指に侵入されたままのアヌス、さらにはそのすぐ下でたっぷりと甘美な蜜を含んだ秘密の花がその花びらと雌しべをふるふると震えさせている。

「さあ、お姉ちゃんの後ろの処女をヒロ君にあげる。ゆっくりと、慎重にしてあげて♪」
ペニスに注がれるローションは翠の体温で温められて、冷たくは感じない。ここまでお膳立てをされながらも、少年は訊かずにはいられない。

「いっ、いいの……？　こんな……こと……っ」

喉がカラカラで思うように声が出なかった。そんな少年を見つめながら翠がにっこりと笑う。その背中に半ば隠れるようにしながらもじつと少年を見つめる学級委員長は耳まで

真っ赤だ。勉強もエッチも優等生な彼女だったが、お尻はまだ未経験のはずだ。

「いいのよ。前の処女は、恋人になってから。……そうよね、お姉ちゃん？」

ちゅぽんっ。かすかな音をたてて翠の優美な中指が淫らな任務を終える。引き抜かれる感触に畳に突っ伏してしまふ沙耶の唇から漏れるのは喘ぎでしかない。

「ああ……か、柿谷君……」

沙耶の言葉はそのまま途切れてしまい、かすかな喘ぎだけが聞こえてくる。彼女に拒否されていないことを確信した少年は、先端からトロトロと粘液をしたたらせるペニスを意識しながら膝立ちになり、憧れの美教師の細腰に手を添える。

「先生……いくよ。僕、優しくするから」

「柿谷君……あの……お願い……優しくしてくれ、信じてるから……」

顔を伏せたまま呟く沙耶。アップにしている髪が若干ほつれ、美しい黒髪がうなじにかかっているところが妖艶だった。真っ白い細いうなじから滑らかな背中にはすつきりとした背骨と肩甲骨の浮き上がりが生々しくも美しい。

無駄なお肉のない細い腰からお尻にかけてはモデルよりも肉感的なむっちりとした感じだ。お尻へと続くカーブには、もはや彼女の唯一の衣服であるタイトミニのスカートが辛うじてひっかかっている。そこに力をかけると年上の女性がかすかに呻くのがたまらない。ビクビクと震える肉槍を収縮を繰り返す菊門に狙いをさだめていく。

ヌプッ！ ニュプニュプニュプウウウ——ッ！

抵抗は一瞬だった。すでに翠の指でとろかさされていたアヌスは意外なほどにほぐされて、ヒクヒクと痙攣しながらも男のモノを受け入れていく。一瞬開いては締めつけ、また開いては締めつける感覚は幾層にも重ねられたゴムリングを思わせた。

「はううっ……は、入ってくるっ。柿谷君のが……奥まで来ちゃう。……ひあああっ」ズブツ、ジュブ——。

断続的な収縮の中、肉の凶器は女体の最も秘められるべき器官を貫いていく。ゆっくりと、しかし止まらずに。カリが通る瞬間の収縮、通り抜けた瞬間のキュツとすぼまる感触が肉竿に甘美な締めつけを与えた。

「くうっ。……ぼ、僕も……気持ちいいですっ……先生——っ」

やがて、男子生徒の下腹部が女教師のお尻に触れる。根元まで入ったのだ。先端は柔らかくもしなやかな腸壁に触れている。アナルセックス——。話には聞いたことがあったけれども、実際に自分がしているのだと思うとことさらの感動がこみあげてくる。

そこまで許してくれる女性はほとんどいないということだった。そんな場所を先生が僕に捧げてくれている。その思いが少年を今までにないほどに高揚させていた。

「うっ、動くよ、先生……」

腰を前後にグラインドさせてピストン運動を始める。腸内粘膜の締めつけは膣のそれとは違い、ごく緩やかだ。しかし入り口の締めつけはかなり激しく、竿を激しくしごかれるような感覚が少年の官能を急速に盛り上げていく。

「すごい……あんなに大きいのが入っちゃってる」

「大丈夫。ヒロ君は優しいから女の子に怪我させたりしないわよ」

後ろから翠にしがみつくようにして覗き込んでいる由香里だが、その表情は羞恥と同時に羨望もまじっているようだ。もじもじと膝立ちのまま太腿をすりあわせている。

「うふふっ。由香里ちゃんも感じちやっっているのね。実はあたしもよ」

「ひゃあああっ」

翠がいきなり由香里の下腹部を撫で回すと盛大な悲鳴があがった。快感まじりの嬌声だ。力の抜けた女子学生を抱き抱えるようにして女子大生がささやく。

「私たちも参加しましょう。あなたはヒロ君の上半身をお願いね」

半裸の女たちが少年を取り囲む。その潤んだ瞳は目の前の淫靡な光景をさらに淫らなものにすべく期待している。

「んちゅっ——んんっ……んくっ……っ」

少年の横に回った幼なじみはせつなげな呼吸のままの少年と唇を重ねた。すでに下半身からの悦楽だけで十分高まっている弘樹だったが、学級委員長のキスを拒むこともできず、さらなる快感に全身の血流が熱くなるのを感じていた。

「うふふっ。お尻でされるのがお姉ちゃんだけじゃ、不公平よね。えいっ」

今度は自分のお尻に翠の指が入ってくる。先程のいたずらで道をつけられた若者のお尻に指が押し当てられる。ズンズンと女教師のお尻をえぐり抜く少年は自分から家庭教師の

指にお尻の穴を押しつける形になってしまふ。

「んんくっ……んんつつ!!」

今まさに沙耶のアヌスを攻めているせいとか、先程とは違った感覚がお尻から湧き出てくる。もどかしくもせつない、それは確かに性感だった。

「あらー、ヒロ君、そんなにおねーさんの指が欲しいの？ うふふっ。あ・げ・る♪」
「……つつっ!」

由香里に唇を奪われたままではまともに悲鳴をあげることができない。

「ああっ……柿谷君っ……すごい、すごいのっ……」

腰の動きを緩めれば沙耶の腰の動きが激しくなり、結局激しく腰を動かすはめになる。じゅぷじゅぷとほぐされたアヌスに翠の指が侵入してくるのを甘受するしかない。狭い排泄口がいつの間にかほぐれ、クチュクチュと恥ずかしい音をたてている。

「うふふっ。ヒロ君の表情、大好きっ。私も感じちゃう……っ」

少年の脇腹や腰に自分の身体を押しつけながら家庭教師が喘ぐ。一方では同級生に唇をふさがれたまま、苦しい呼吸のまままで腰を貫くのは熱く激しい肉欲の炎だ。

はあっ、はあっ、はあっ——。

背中が、腰が、そして股間全体が火のように熱く、ペニスから全身が溶け崩れてしまふ。そんな気持ちよさだった。前では憧れの女教師のアナルを貫きながら、同時に家庭教師のお姉さんの指でお尻の穴を愛撫されていた。一方で唇は同級生の学級委員長とのキスの最

中で、彼女も全身をすりつけて貪っている。

(うっ、うわっ……も、もう持たないっ……)

せめて懂れの女教師より先にイクわけにはいかない。その思いが少年を辛うじて支えていたが、激しい愉悦が腰の動きを加速してしまう。

パンッ、パンッ、チュプッ……。肌と肌とがぶつかりあう音に水音がまじり、乳房とアヌスの同時攻めをされている女教師の身体が大きく震えた。

「ひあっ、ああっ、あっ、あっ……あっ、んんっ……だっ、だめえっ……あああーっ」
ついに初めてのアナルセックスで女教師が達した。ビクビクと激しく締めつけるアヌスが厳しく肉竿を刺激、膨らみきつた射精衝動を暴発させる。

「んんんくくっ……つつんっ、ぐぐぐくくっ——っ」

声にならない呻きとともに、コチコチに固くそびえ立っているペニスが痙攣する。断続的な収縮とともに濃厚な精液が迸り、直腸を貫いて結腸までも熱く汚していく。

ドピュッ！ ドクドクッ、ドッパアアアアアッ——！

「ああっ……ヒロ君がすぐく震えている……あたしまでっ……あっ、ああああっ——！」

少年の身体を貪りながらも自分の身体を慰めていた同級生と家庭教師も同時に達する。姉の豊満な肢体を存分に蹂躪しながら身体をすりつけていた翠が、弘樹と唇を合わせ、彼からみついたまま自分の身体を慰めていた由香里が身体を痙攣させる。

「んああっ……んんつくっ……んんんん——」

少年の肌にわたりの身体から滲む蜜がしたたる。四人の男女のそれぞれの快感の叫びがアパートの一室で冬物のカーテンに吸い込まれていった。

「ああっ……柿谷君の……身体……すごく気持ちいい……」

少年が言葉もなく呼吸を整えようとしていると、翠と由香里も抱きしめてくる。

「お姉ちゃんもヒロ君も……んくっ……お肌スベスベなんだもの……」

「あんっ……弘樹君が感じていると、私まで感じちゃうの……」

わたりの甘い呻きと喘ぎ。少年はその中心でなんとか身体を支えていた。それぞれの心臓が、呼吸器官がエネルギーを全身に送り込むべく働いていた。

その場の全員が、いまだ濃厚な絶頂の余韻に浸っている中、たった一人の男が動きを見せた。ぐったりと力を失った少年はやはり崩れ落ちて突っ伏している女教師の背中に身体を重ねた。そのまま彼女の黒髪に顔を埋めるようにしてささやきかける。

「先生、僕は先生の恋人になりたいです——」

びっくり、とわたちが反応した。

「僕は先生が好きです。どうすれば、先生に受け入れてもらえますか……」

続けられる少年の言葉。三人のわたちは荒い呼吸の中、それぞれに言葉を探しながら喘ぐのだった。



「うう……わ、わかったわ……弘樹君のいいようにしてちょうだい」

彼女の反応に胸が高鳴る。あの、お固い厳格な久島先生にこれほど女らしい、初々しい反応を見せるなど、誰が知るだろう。学校の男の誰もが憧れているだろう豪華なボディを、今年だけが味わっている。

「恥ずかしいから……あまり見ないで」

「それは無理だと思うな。先生の裸、すごく綺麗だから……ほら、脱がすよ」

「ああ……すぐく恥ずかしいっ」

むっちりと張りつめた下腹部から太腿。その中心を飾っている小さな布切れに手をかけ、ゆっくりと手を動かしていく。恥ずかしそうに顔をそむけながらも沙耶が腰を持ち上げてくれたために比較的簡単に脱がせることができた。

足首まで抜いてしまったショーツは、予想通り船底部分が湿っていた。その中心部分は明らかに濡れていてぬめりを帯びているのがわかる。

「やっぱり、下着が濡れてるよ。先生……感じてるんですよね」

「ああ……そんな意地悪なこと言わないでっ……お願いっ」

あまりの恥ずかしさに顔を覆ってしまった女性の身体を優しくなぞっていく。太腿から腰、腰から脇腹、乳房。どれも彼女の感じるポイントなのはわかっていた。一カ所ごとに身体を固くし、よじりながら快感を訴える自分を叱りつけるかのように声を押し殺している。

「感じるのには恥ずかしいことじゃないはずですよ。もっと、もっと感じてください」

先生の身体から一瞬力が抜けるタイミングを見計らって太腿の間に膝を割り込ませて侵入口を確保する。気づいた女教師が太腿を閉じ合わせようとすけれどもう後の祭りだった。その間に手を伸ばしていくとそれだけで大きく女体がうねった。

「ほら、もう濡れてる。先生のここ、ビッシヨリです」

「ああっ……だから、だからだめだっていったじゃないっ……ひゃうっ」

一度こじあけられてしまった快楽の門が閉じられることはなかった。膝が入ったことによつて弘樹の手が秘処にまで届くようになり、彼女が快感に自分を抑えられなくなるたびに太腿が開かれていき、ついには少年の両膝が入ってしまうようになる。

クチュッ——。

恥ずかしい音が愛しい女の最も女らしい部分から漏れる。柔らかい花びらをくじり、その間に指をなぞるように滑らせるところえきれない呻きが沙耶の唇を突く。

「ひんっ……あ、あううっ……」

すでにじつとりと濡れているので、わざわざ湿らせる必要はない。汲めども尽きぬ神秘の泉から蜜をかきとり、花芯に塗り付ける。それだけで女の唇からは呻きが漏れるというのに、若者は花芯の肉粒を守る鞘を引きむき、素裸にしてしまった。

ヒクヒクと、かすかに動く女性器の中心。最も快感神経の集中しているとされる快楽器官だ。クリトリス、陰核、おサネ、お豆などと呼び名はさまざまだが、最も快感を得られ

る器官の一つだということは一致している。それは普段厳しくも凜々しい久島沙耶教師も例外ではなかった。

「ああーっ、クッ、くりトリスっ、いきなりっ……はうっ、あっあああっあっあっ——」
続けざまの狂おしい快楽の叫び。これがあの冷静で手ごわい久島先生のものだとは思えないほどだ。花芯をとらえて蜜をまぶし、それを指で上下左右から撫で回す。ただそれだけで面白いほどに沙耶の身体は反応する。

「指、入れますよ」

返事はもはやない。少年の指が発する快楽のパルスに支配されてしまった女体から理性が弾き飛ばされてしまったようだ。指一本で女体を支配するような感覚に少年の欲望はさらに広がり、心の奥底からあふれだしていく。

はあっ、はあっはあっ——。

荒い呼吸音。せつなげな女体の中心で侵入口をさぐる指は、すぐに秘裂の奥でヒクヒクとうごめく穴をさぐりあてた。指を押し当てるとギクンと大きく反応があった。腰が大きくうねり、漏れ出る呻きがひどく甘い。

「はああ——っ、あっ、ああっあっ……は、入って、入ってくるう——っ」

一度堰を切ってしまった反応はもう抑えきれないようだ。入り口の締めつけを突破して侵入していく指。そのまま中での字に折り曲げ、内部の感触を楽しむ。ヒクヒクと締めつけてくる膣内粘膜、内側のザラザラ、ツブツブした感触。中で広がり、またすぐに狭く

なる起伏に富んだ内部形状。すべてが指に伝わってくる。

「はあっ、はあっ……あうっ、んあ、ああああ——っ」

蜜のたつぷりとつまった果実をほおばるように、豊潤な内部をじつくりとかきまわし、奥までの内部のひだや粘膜の感触を確かめる。そのたびごとに抑えきれない嬌声が女教師の整った美貌を突き崩し、艶やかな唇から悲鳴が漏れる。

「先生……すごく、濡れてる」

返事はなかった。代わりにいやいやをするように顔を振りたくる。そんな様子が可愛くて、内部とクリトリスとの二点攻めに移行すると全身のうねりが激しくなっていく。

ジュプジュプと発泡音がまじる。かすかにきしむベッド。そして、高く、低く時にうなるように、また時には甘くすすり泣くように、漏れる女の声。生々しい呻きは喘ぎにまじり、ついには叫びになる。

沙耶の魅力的な肢体と、可愛くもいやらしい嬌声に少年もすっかり興奮していた。男の器官の先端からはとめどもなく粘液がしたり、ビクビクと震えていた。

「僕も……もう、我慢できないよ。……いいかな？」

返事は言葉ではなく、小さく恥ずかしげな頷きだけだ。普段の沙耶であればそんな不明確な問いかけではどやされてしまうだろうに、今はこんなにもおとなしやかだ。彼女に受け入れられていると実感しながら、彼女の太腿の間に腰を割り込ませていく。

「私、先生なのに……生徒としちゃうなんて、悪い教師だわ」

「そんなことないさ。僕を志望校に合格させてくれた、最高の先生だよ」

幾度も顔を振りたくったせいとか、長く艶やかな黒髪が乱れ、広がっているのがひどく淫靡だった。タップと音がしそうなほどに豊かな乳房は、興奮のためかピンクに染まり、秘密の泉を守るくさむらもじつとりと濡れている。

「ああ……触ってる……柿谷君のが、触ってるの」

自分のことを名前で呼ぶなどと言いながらも、沙耶もいつもの呼び方に戻ってしまっている。想い想われていてもすぐには関係は変わらないようだ。

「先生、いくよ」

入り口の割れ目をなぞるだけでビクビクと震える女体に優しく触れながら、先端に手を添え、グイグイと力をこめながら腰を突き出していく。

ミチミチミチッ——！

よく鍛えられた沙耶の内部は学生である由香里にも劣らないほどに締まっている。入り口で亀頭をしごかれる感覚だけでもペニス全体がヒクついてしまう。憧れの女性の処女地をついに制服する快感がこみあげてくる。

今まで男を知らない年上の女性の処女地をとらえた男性自身は侵入者を拒否するような膣圧に対抗して力をこめながら、少しずつ侵入していく。

「く……んんんっ……き、キツイ……」

痛いとは言わないのは年上の女性の矜持だろうか。二十数年守り通してきた操が、今破

られようとしている。痛くないわけがなかった。いくら感じやすいといっても、やはり初めては初めてということだ。

「い、痛いのか？ ごめん、先生……僕、優しくするって言ったのに」

彼女に苦痛を味わわせたくない少年は思わず腰を引こうとしたが、沙耶の優しい手がそれを押しとどめる。

「うん……柿谷君は十分優しいわ。だからいいの。柿谷君が気持ちよくなってくれば」
「っこりと微笑んでくれる年上の女性。普段の厳しさが嘘のような優しさに少年の胸は
いっばいになってしまった。せめて彼女が少しでも痛くないようにと、少しずつ腰をグラ
インドさせ、肉槍をくりだしていく。」

「んっ……うんっ……あっ……も、もう……奥まで……奥まで来る……」

ぴっちり閉じた肉層を切り開きながら突き進む男性器が女性器の奥底に到達する。内部は
部はいったん広い空間に出たのちにまた狭くなり奥へと続いている。途中にザラザラした
感覚が亀頭を刺激する部分があつて、こすれる感覚がたまらない。

「入ったよ……先生。奥まで、入った」

「うん……私のことは気にしなくていいから、柿谷君が……その、いいように……」

少年が快感を得るのが嬉しいのだと続ける女教師が愛おしく、思わず強く抱きしめてしまった。彼女の大きな乳房が自分の胸板にあたるのがなんだか照れくさいが、それさえも
充実感の一つだった。

(今……先生としているんだ……)

沙耶の目が開き、間近で視線が合った。なんだか恥ずかしくてお互いに目をそらしたその拍子にキュンと強く締めつけてきて、あまりの快感に思わず呻く。沙耶も少年を強く感じたらしく、唇を結んで呻きを押し殺している。

「先生の中、すごくキツイ。よすぎて、すぐ発射しちゃいそうだ」

「は、恥ずかしいわよ。そんなこと言われると……困っちゃう……」

沙耶の内部はその羞恥にも敏感に反応して締めつけてくる。入り口と奥とでそれぞれに締めつけてくる二段締めだ。多分、名器と言っているだろう。

「動くよ」

「うん。柿谷君のいいようにして。私を柿谷君の好きなようにしていいのよ」

沙耶にこれほど想われているとは、自分以上の幸せ者はいないと思う。その充実感は少年の全身を熱くし、ペニスへの充血度もあげていく。ビクビクと反応してうごめくペニスは愛しい女の内部でこれ以上ない幸福感を味わっていた。

「あっ、ああっ、んくっ……ひいいっ……」

奥まで入れたものを、いったん引き抜いてもう一度挿入すると、さしもの堅物教師も声を抑えきれないようだった。少年が突きこむたびに甘く呻き、引き抜こうとするとしがみつくようにキュウキュウと締めつけてくる。運動神経抜群の彼女は初めての戸惑いもじきに薄れていき、積極的に腰の動きを合わせてくる。



ズチュツ、又チュツ、ジユプツ——。

かすかにベッドがきしみ、そのたびごとに年上の女性が呻き、喘ぎ、悶える。自分の手で、自分の動きで彼女が乱れていると思うだけで発射してしまいそうに気持ちがよかった。実際に彼女の締めつけは激しく、腰の奥からペニスの先端まで痺れるような快感が満ちてきていた。

「くうっ。先生、僕……もう我慢……できないよっ」

「いいのっ。いつでも……いつでも、好きな時に……してっ……自由にしてっ」

両手ですがりついてくる沙耶の肌もすでに汗でじつとりと濡れ光るのが淫らだった。お互いの滑らかな肌がこすれあうだけでも気持ちがよく、結合部からの快感が身体の奥で燃え盛る炎のようだ。

「はあんっ……か、柿谷君……わ、私も……私もおかしいの。気持ちいいのっ」

彼女の内部が不規則な締めつけをしてくる。充血して肥厚した膣内粘膜がからみついてくるために、内部のザラつきの刺激も激しくなっていた。彼女も達する寸前らしい。

はあっ、はあっ、はあっ——。

ここぞとばかりに力強く抽送を送り込み、腰を上下左右にバラつかせて肉槍を打ち込んでいく。今の弘樹にとっては精一杯のテクニクだった。

「あっああっあっ……へ、へんに、へんになっちゃうっ……あああああ——っ！」
「くっ……先生、僕も、僕もイクッ。出るっ——っ」

こらえきれなくなった沙耶の内部で何かが弾けた。激しい悲鳴にも似た嬌声とともに内部が激しく収縮し、男根を絞りあげる。その快感は射精寸前だった弘樹も一気に追い上げていた。激しい腰の動きが緩んだと思うと、ペニスが激しく痙攣していた。

ビクッ！ ビクビクビクッ！ ドピュッ、ドピュルル——ッ！

身体の奥を絞りあげる激しい射精感に若い男性器官が大きく震え、悶える。断続的に弾ける悦楽とともに熱いスペルマが美貌の女教師に注ぎ込まれていく。

「はあっ、はあっ、はあっ……先生、すごく気持ち……よかった……」

「ああ……まだ……出てる……私もヘンになっちゃったみたい」

心地よい脱力感の中、柔らかい沙耶の肉体に身体を預けると、優しい腕が抱きしめてくれる。大きな乳房が二人の身体の間で歪み、少年の身体に密着していた。

「先生の身体、最高です。僕、感動しました」

「やだ、恥ずかしい。柿谷君、大げさよ」

少年にとっては大げさではなかった。どこをとっても理想的で、柔らかくてすべすべして温かく、そして感じやすい。大きくて触り心地のよい乳房、細く締まった腰。よく鍛えられてすっきりと優美な脚。そして、厳しいけれどもとても優しい人。これ以上の女性はないという気がして、つい手を出してしまう。

「ああんっ……まだ足りないの？」

「だめですか？」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

